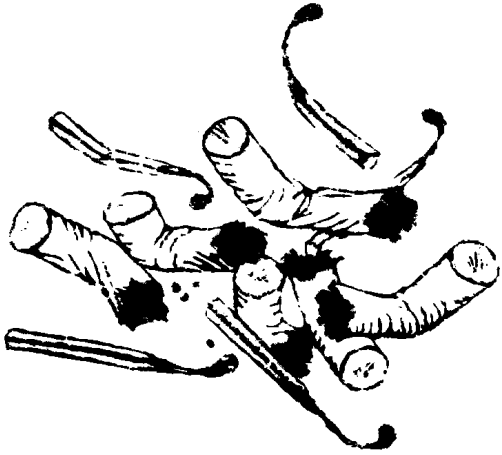
地下水

川崎長太郎



集英社

地下水

一九八一年一〇月二五日　第一刷印刷
一九八一年一一月一〇日　第一刷発行

定価　一四〇〇円

著者　川崎長太郎

装丁者　赤坂三好

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部（〇三）二三八―二八四二
販売部（〇三）二三八―二七八一

印刷所　大日本印刷株式会社
検印廃止。乱丁・落丁本はお取替えいたします。
© 1981 C. KAWASAKI
Printed in Japan　0093―772345―3041

地下水

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

1

満洲事変が突発してから、東京市内の講演会場などで、カーキ色の軍服姿が演舌する場合が多くなった。その他、政治、学術、芸術等各方面の講演を会場へ出かけ要点だけ書きとめてき、原稿紙五枚前後にまとめる仕事で、月づき三、四十円、銀座裏の連合通信社から庄太は貰い、虎の子の定収入とした。一方、小さな出版社が出す同人費のいらない仲間の雑誌や、同人雑誌に毛の生えたような文芸誌へ、年間三、四篇私小説も発表するが、三十五歳になりながら貧乏で妻子を持てない独り暮しを余儀なくされ、本郷・湯島天神の大鳥居に近い大工の二階へ間借りしていた。

夏場に向うと、毎年めっきり講演会等の催しものが少なくなるので、庄太は避暑気取半分、古ぼけた柳行李を鉄道便にし、風呂敷包だけ抱えて、七月中旬小田原へ帰省し、勝手の知れた実家の物置小屋へ起伏する身状に変った。魚箱など商売道具の並ぶ、屋根もぐるりもトタン板をはった建物には、宙吊りの棚みたいな場所もあり、毛羽だつ畳二枚を敷き、押入もついていた。夜分は板切れへ五寸釘をうちつけた燭台へ立てる二十匁ローソクの明りを電灯代りとし、ひどい吹き降りに雨脚がスキ間だらけな小屋へ殺到すれば、押入の中へ難を避けて躰をエビのように丸め、どうにか寝入るあんばいであった。食事は弟の家へ喰いに行った。

親に叛いた長男の身替り同様、庄太より十歳とし下の信次は、甲府市外の歩兵四十九聯隊から上等兵として除隊する早そう、亡父から譲られた家督を嗣ぎ、箱根にある大小三軒の温泉旅館へ魚をあきなう稼業についた。六畳四畳のふた間しかない家に、五十坪の敷地以外、まとまった遺産もなかったが、母親、兄、弟三人の名儀で銀行へ預金されてあった僅なものが、庄太のはからいでそっくり信次のふところへはいったりして、無事に親の跡目が相続されるようであった。

魚市場へ近い、海岸通りにある中古の二階家を買い取り、四年ごし中風を病む母親、お手伝の小女共ども新居へ移転し、亡父名儀の儘になっているもとの家は、十円の家賃でカマボコ職人へ貸した。地所も家屋敷も、自分の代りに魚屋となった弟へ庄太はくれるつもりだが、信次の方では親のものをみんなとってしまっては外聞も悪い、などと尻込みしている模様であった。

二階家へはいって間もなく、信次は女房をもつ身の上となった。相手は得意先の旅館へ女中奉公していた、小田原近在の農家の末っ子で、両親に甘やかされ、すらりとした姿の娘である。信次より三つとし下の二十二歳、名を糸といった。兵隊へとられた間中、文通もあった二人の仲は、新婚当時型通り結構睦まじく、信次は商売を早目にかたづけ、出入り先から家へ帰ってきた。糸の腹に子がくるようになると、もうお嫁にゆく躰ではないから、白粉なんか塗るのも無用とあるみたい、彼女はなりふりかまわず朝から晩まで、よごれた割烹着をひっかけ、はたち前で働き者のお手伝共ども、洗濯もすれば台所でも尋常に立ち回る様子であった。

そんな彼女に段だん姑が目の上のコブとなっていた。信次に中気で脚腰の立たな

い母親がいる事は、百も承知の上で嫁入りした筈ながら、ひと中で揉まれ他人のメシを喰った覚えは、旅館で働いた間だけの、人見知りの強い、内気でその癖強情な肌合では、横のものも縦に出来ないのにやたら口数ばかり多く気むずかしい病人と、何かにつけて折合わない。見知らぬ客が店先へ現れるや、おどおどして挨拶も抜きに台所あたりに隠れてしまうような糸の振舞や、馴れていない商売上の電話へ出ても満足に応答しかねる気転のきかなさ加減等、亡夫を尻に敷きがちだった母親の眼に随分余った。迚も商人の女将に似合いの女ではないと、ずけずけ信次の前でも難癖をつけていた。初手から母親には、糸の嫁入り道具が気にいらなかったらしい。相当弾んだつもりの結納金に較べ、箪笥、夜具、鏡台、下駄箱など、貧乏人にしては一応揃ったみてくれが、箪笥の曳き出しから柳行李が出てくる有様に、母親はあきれてしまったりした。夫が在世中なら、糸如き者を家へ入れるなんか出来ない相談、とまで息子へ面あてがましくケチをつけて憚からない姑口であった。

そんな母親も、もう少しお化粧や身なりをかまうようにしたら、と穏かな言葉遣いで注意したり、機嫌のいい時は、信次をさそって映画館へでも行ってお出、わた

しは芳ちゃん（手伝女）と留守番しているから、などと嫁にすすめたりする具合でもある。日頃煙たがっている糸も姑にそんな出方をされればいやな顔は出来なかった。

庄太が物置小屋を出るのは毎朝きまって九時過ぎである。痩せた小柄な躰に、ランニング・シャツ、半ズボンをはき、髪の毛がのばしぱなしでむさ苦しい頭へ、ツバの広い麦藁帽、焼杉の下駄をひきずり気味に、のろ臭い歩き振りであった。

防波堤へ近い、漁師や箱根細工の職人達が住む、棟割長屋の前を通り抜け、道幅五メートル程ある海岸通りの両側へ、二階家、平家建とでこぼこにトタン屋根をつらねるあたりを、箱根山の方を向いて五分ばかり行ったところで、弟の家の前へ出る。夏場は商売の書入れ時で、庄太がのっそり現れる頃には、信次は臨時に雇った助っ人と一緒に、売りものの荷を担いで出かけてしまっていた。単衣の裾をはし折った糸とお手伝の芳子が、コンクリートで固めた店先で、生臭い匂いがしみつくたらいや俎等、道具のあとかたづけに忙しかった。

庄太が下駄をぬいで上る四畳には、横とじの帳面やソロバン、ハトロン紙がまだほうり出した儘になっており、昼中もうす暗い次ぎの部屋には、小型な掛布団で下腹部から膝頭へんを隠した母親が、座布団を敷いて根が生えたように坐っている。半白毛の頭髪を長目の坊主刈にし、円味のある顔が頬のあたりげっそりこけて、もともと色白だった顔面は長患いに日陰っぽくふやけて、上背のない躰へ脂肪がまわり、目方だけは十三、四貫ありそうであった。

いつも眼を細くして、表の海岸通りをぼんやり眺めている母親に、朝の挨拶がわり、庄太は「ゆうべはよく眠れたかね」とか「便通はあったの」とか、いろいろ言葉をかける。返事をきいてから隣の台所兼食堂の狭い板の間へはいり、彼ははじめて顔を洗う段取にかかるが、それから食卓へ向い、梅干や香のものなんかおかずに茶漬を二、三杯かきこんでいた。

終ると食後の「暁」をふかしながら、母親の控える四畳へ戻り、庄太は新聞紙を拡げる。部屋には頑丈な金具のぶら下る古箪笥と差向いの位置に、紫檀の小さい仏壇が飾ってあった。父親の位牌も恰好な置場がない家なしの庄太は、昨年思ったよ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

り余分な短篇小説の原稿料を手にした際、弟の同意も得、仏具店から買ってきた品物であった。

継母育ちで、小学校も出ていない母親は、老眼がかすんでから新聞も余計読めず「何か変ったこと出ていないの」と、庄太の方へ二重瞼のくぼんだ眼をよく向けた。彼女の眼頭には確かなものがまだ光っている。彼はかいつまんで三面記事の荒筋を紹介したり、ついでに珍しい写真でも出ておれば、その部分を母親のしゃくれ気味の高い鼻先へ突き出し、何かと説明したりした。そのあとパンツ一つのいでたちに早変りして台所へ行き、手押しポンプをあおり始める。水はブリキ製の樋をつたわり、隣の風呂桶へ溜る仕掛けになっていた。

帰省した当座、庄太は中休みせず桶へ水を七分通り一杯にすることが覚束なかった。が、五日十日と続ける間に、息切れもしなくなった。その次ぎに、もう一つ彼の手伝う仕事があり、木の箱や水樽へ氷詰めにされた買い置きのタイ、マグロ、車エビその他リヤカーへのせ、数百メートルはなれた製氷会社の倉庫までひっぱって行くのである。零下何度の倉庫には、自家の冷蔵庫代り、箱根の温泉旅館へ出入り

する魚屋、八百屋、肉屋の商品が、ところ狭しと積まれ、しょっちゅう目まいを催す程むっとするような臭気が立ちこめていた。

いい齢して小僧のする真似をと気がひけ、庄太もリヤカーをひっぱってゆく自転車のペタル踏みふみ、三度に一度はうんざりした。往来ですれ違う故里人の手前、恰好が悪いとたじろがないでもない。と、したところ、当人はたち前後まで親のあと嗣ぎとして、足掛け五年間毎日のように荷を担いで、まだ登山電車のなかった当時、急勾配の坂を登ったためしのある魚屋上りであった。現在でも文筆に縁のある者とは一寸受取りにくい位、骨太で頑丈な手をもっており、発育盛りを山路で鍛えぬいた躰は、上京後つぶさに味わった十数年に及ぶ貧乏生活にも、病気らしい病気した覚えがなかった。

腹を痛めて産んだわが子が帰省して、ひんぱんに二階家へ顔をみせるのを、母親は気を悪くする訳がなく、庄太も又いまだに「おっ母ちゃん」と、乳離れしていないようないい方していた。糸やお手伝がはたにみえなければ、母親を仰向けに寝か

せ、便器を重たい腰の下へさし込んだりする世話をし、病人も何かと彼へ話しかけ、東京での日常を根ほり葉ほり問い糺し、借りている大工の家の四畳半の風通し具合までたずねてみた。五年前庄太が半年ばかり同棲し、主として貧乏が原因で別れてしまった女は今どうしているか、その女と別れたのは返すがえすも口惜しい云ぬんと、一度東京・牛込の貸間で対面しただけの石女も忘れかねるのであった。又、夏でも物置小屋は夜明けの冷え込みがきついから、寝びえしないようにいいきかせ、庄太がたべそこねたお八つのふかし芋を芳子に出させるべく気をつかったりした。糸を非難するのに彼はうってつけの相手でもあるが、三十歳もなかば過ぎながら、人並みの世帯が持てない甲斐性なしが歯痒く、長男の将来をあれこれ思いやればきりもなかった。夏になるときまって襟垢のついた着物や肌着を突っ込む古行李をさげて帰り、秋風の立つ頃まで弟の家でただめしを喰らって行くぐうたらさ加減はまだしも、一枚看板としているらしい小説は一向芽も出そうにないのに、性懲りなくかじりついている庄太の気心が、悪い憑きものにとり憑かれたみたい、彼女には呪わしく忌いましい限りであった。ある日の如き、彼の胸倉をつかまえてこづき回す

ような眼色となり「それ程好きな道ならたって止めろとはいわないけど、なんとしても人間喰えなければいけない」「貧乏世帯一つもてないで小説も糞もないではないか」「先ず喰うこと。人にうしろ指さされない世渡りをすること」等とう世間並みな意見をまくし立て、揚句老いのたるんだ瞼を引裂くようなけわしい面相に変り「――この生れぞこない奴」と庄太を頭ごなし罵倒しはじめ、嫁を彼や信次の前でくさす場合とは較べものにならない、すさまじい癇性の発作に見舞われたりもした。彼は返す言葉なく、頭をかかえ、表の方へ跳び出していた。

今回の小田原行に、母親のいいつけ通り、庄太は糸へ手土産として、半襟をひとかけもってきた。軽い脚気を彼女が患っていると聞けば胚芽をのむようにすすめ、妊婦向きのカルシューム製薬を買ってきて与え、彼も却なか細かく気のつくところをみせ、母親が口穢なく嫁の非点を並べ立てれば、糸をかばうような出方にもなっていた。彼女も自分から一箇十銭の「暁」を彼に呉れたり、彼の好きな喰いものをたずねて食卓へ用意する寸法でもあった。が、東京から庄太の下げてきたよごれも

のには一切手出しせず、一緒に食卓についている彼が差出す茶碗へめしをよそる役目も、たいがいお手伝へまかせていた。

母親の朝のうがい、大小便の始末、おむつの洗濯等、病人の面倒を何から何まで嫁にきた当時からお手伝へ押しつけ、母親にしてもその名を呼び捨てにする糸より、ちゃんづけにいう芳子に、前まえどおりして貰う方がずっと気安いらしかった。五尺そこそこで横幅の勝った娘は、糸の反対に割烹着も毎日丹念にとり換え、寸詰りな躰を少しでも高くみせるために、身につけるものの着方もおろそかにしていない。色は浅黒く皮膚も厚ぼったいが、円顔でぱっちりした大きな眼にきかぬ気の張りもうかがえ、することなすこと敏捷であった。

糸同様、近在の農家の出で、肩揚げのついている時分から魚屋へ奉公にきており、すっかり家の者に馴染んで、主人・使用人のへだてもあらましなくなりがち、病人を「小母さん」信次を「信ちゃん」庄太を「庄さん」とよんだりしていた。嫁がこない前までは、台所仕事から、病人の世話、小僧代りに魚市場へリヤカーをひっぱってゆきもする評判の働き者で、給金は特別弾んでいないまでも主人側は、重じゅ

う彼女を恩に着、とりわけ病人は実子のように芳子と親しみ、一つより持ち合せない旧式な金の指輪など、そっと彼女へくれたりしていた。

馴れるにつれ、糸は芳子からどちらが嫁だかわからないような口のきき方をされたり、ぞんざいな返答返しに面喰らう折もあるが、なるべく目をつぶっていた。彼女がいるお蔭で、手数のかかる病人の用事が省けるだけでも大助かりであり、店先で生魚を扱う仕方も彼女に及ばない。芳子の方ではいずれ山の温泉場へ行き、糸がしていたような女中奉公する希望であり、その旨を既に信次までつたえてあった。したが、病人にとり縋るばかりにされれば、いつになったら魚屋から出て行けることかといらだち紛れ、近頃では誰に向っても言葉遣いが荒っぽくなり、病人へもずけずけした口をきき、置くべきものもいきなりそこへほうり出す始末になりがちである。そんなふうでいて、夜分病人の傍に寝かされ「芳ちゃん、おしっこだよ。悪いけど」とすまなそうにいわれると、ぶつぶつ皮肉めいた口叱言まじり、ブリキ製の便器を相変らずとりに行かずにもいられなかった。達者な時分の母親とは、よく二人連れで銭湯へ出かけ、互いに背中も流し合ったり、縁側の板の間へ差向いに坐

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c